

---

# 混沌と化した世界

T64

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

混沌と化した世界

### 【Nコード】

N2759Z

### 【作者名】

T64

### 【あらすじ】

ある日、突然それは起こった。

死体が生きている人間を襲い始め、襲われて死んだ人間も動く死体として蘇り、生きた人間を襲い始めた。

日本だけでなく世界をも巻き込んだそれは、世界を混沌へと陥れた。

そんな力オスな世界で、中学3年生の、三浦千歳<sup>みづうちちとせ</sup>は生き残れるのか。

そして危険なのは本当に「ゾンビ」だけ」なのか。

## ブログ（前書き）

初投稿なので下手だったり不定期更新だったり短かったり色々見  
苦しい点が

ありますが、暖かく見守ってあげてやってください。

## ブローグ

### ブローグ

都会と自然が混ざりあつた地方観光都市、ひかわし 緋川市。

観光地として賑わっていた緋川市だったが、ある日から街の様子は一変する。

死人が生き返つて生きた人間を襲い、そして殺された人間も同じように蘇り、まるで映画やゲームの「ゾンビ」の様に生きている人間を食うために徘徊し始める。

たちまちにして緋川市は地獄と化した。

更にこの騒ぎは緋川市だけでなく、日本、そして全世界にまでもこの事件に見舞われていた。

## プロローグ（後書き）

なんかあらすじの復唱になってしまいましたw

次からは色々と展開を作ろうと思うので頑張ります！

## 1話 序章（前書き）

更新が遅くなってしまいました…  
それと短めにもなってしまいました…

## 1話 序章

2015年、7月25日。世間一般に呼ばれる夏休みの最初の日だ。

中学3年生の俺、三浦千歳<sup>みついちとせ</sup>は窓から漏れる日差しで目を覚ました。

ベットから上半身だけ体を起こすが、頭がボーっとして視界がはつきりしない。

いつもなら見慣れているはずの部屋が別の物に見える。  
日頃の疲れがたまってるんだな。

自分の部屋を見渡す。俺の家の二階にある俺の部屋は、俺が趣味で集めた物品が所狭しと陳列されている。

趣味で集めた物品とは、アニメのフィギュアとかエアガンとか木刀とか何やら妖しげな魅力を放つ薄い本とかであり、特にいかわしいものは無い……………事も無い。

その為遊びに来るの友人達から「なあにこれえ（笑）」とか「これはひどい」とか色々と言われまくっているいわくつきの部屋だ。

まあ中学3年生になってからは皆遊びに来なくなって特にそのような事は無くなったのだが。

この事から分かるようにも俺はオタクだ。いや、こう言おうか。オタクだったら何が悪い。

というかなんで俺は説明口調なんだ？起き抜けに誰に何を説明しろ



と？

自分で自分に突っ込みながら、ベットから降り、既に物置と化した机の上に文字通りポンと置かれているデジタル時計に目をやった。

デジタル表示は、8時ちょうどを示していた。

普通なら大急ぎで学校に向かう必要のある時刻だが、勿論今日から1か月ほどそんなことはする必要は無い。

何故なら、今日から夏休みだからである。

受験生である以上、あまり表立って遊ぶことはないだろうが、それは致し方のない事だ。

自室から出て、一階へ降りる階段を一段一段ゆっくりと降りていく。灯りや窓がなく、足下がよく見えないからだ。

おい、リフォームしろよ。

どこぞの蟹のように突っ込みながらリビングと階段を繋ぐドアを開け、気の抜けた挨拶をする。

いつもなら父母と妹、そして弟が返事をしてくれるが、返事は一切ない。

そのことを不審に思ったが、何故返事が無いのかはすぐに思い出した。

今日の早朝俺以外の全員が全員九州に2週間程の家族旅行へ出かけたのであった。

……受験生だし仕方ない事だ。

生活に不自由が無いように5万円貰ったからいいか。  
中学3年生に大金持たせて、家に放置して勝手に旅行に出かける親も親だが。

机の上のテレビのリモコンを取ってスイッチを入れる。

リビングの端に置かれた32インチテレビの画面がパツッと明るくなり、地元ローカル局の見慣れた男性キャスターが映し出された。

「……………では続いてのニュースです。緋川市緋川町2丁目で今朝5時15分、猟奇殺人事件が発生いたしました。被害者は会社員と見られています。遺体の損傷が激しく、身元の設定が急がれています。また犯人は逃走中で、以前の事件との関連性が……………」

最近、緋川市では殺人事件が多発している。

それも猟奇的な殺し方で、体中に噛まれた痕があったり、引っ掻き傷があったり、酷い時には腹を裂かれて臓器を引きずり出されたりしていたらしい。

また、襲われて負傷しながらなんとか逃げ延びた人も、ほとんどが後に忽然と姿を消したらしい、と噂が流れているが、定かではない。更に驚いたことに、一部の人間はその事件の不可解さから、ゾンビが現れたのなんだの言い出している。

あり得ないっての。

まあ、それにしても物騒な話だな。

俺は早速淹れたインスタントコーヒーを啜りながらそう思った。

その時の千歳は大した感慨もなく、そのニュースを見ていたのだから。

それが厄災の始まりとも知らずに。

## 1話 序章（後書き）

短めでしたが、取り敢えず次回はもう少し長めにしようと思います。  
ご感想、アドバイスお待ちしております！

## 2話 はじまりはじまり(前書き)

結局短めになっちゃいました

## 2話 はじまりはじまり

16時15分

異変に気づいたのは、それくらいの時間だったか。

俺はその時、部屋でゆっくりしていた。

その時、外から怒鳴り声が聴こえてきた。

『……………の皆さ……！……………発生しま……………はから……………に……………  
……………！』

窓を閉めているせいか、外からの声がかくぐもってほとんど聞こえない。

いったいなんなんだ？

窓を開けると、今まで遮られていた熱気がムワツと襲い掛かってきた。

「あつっ！」

あまりの暑さに窓から顔を離したが、すぐに声の主を探そうと再び窓から顔を出し、思わず目を見開いた。

住宅地の狭い道路をまるでバリケードのように完全にふさぐように数台のパトカーがとまっており、その周囲には警察官が十数人もいたが、目を引いたのはそれらでは無かった。

綺麗な水色と白色で着色したトラックのような車両がそのなかでひ

ときわ異彩を放っていたからだ。

それは俗に言う「常駐警備車」と呼ばれる警察車両の一種で、主に重要施設の警備や暴動の鎮圧に当たる車両だが、普通ならこのような車両は出てこない。

そして、本来それが鎮圧すべき暴徒なども見当たらない。いったい何に使うつもりだ？

俺が頭に疑問を浮かべながら思索していると、赤色のメガホンを持った警察官が見えた。

先程の声の主は彼だろうか？

そして警察官は怒鳴り声に近い声で（メガホン越しだから仕方ないが）叫んだ。

『繰り返します！近隣住民の皆様！緋川市の南側で大規模な暴動が発生致しました！暴徒は無差別に人々を襲っており、現在屋外はとても危険です！』

マジっすか。

『きちんと戸締りをしたうえで、外出を自粛することを強く『推奨』します！』

……………自粛だの推奨だの面倒くさい言い回しだな。まあ業務上そうなってしまうのは仕方ないが。

『それから……………』

その時、突然なにかが破裂するような音が警告を行う警察官の声を掻き消した。

『な、なんだ！？』

メガホンを持っていた警官が音のした方向を振り返るとパトカーの近くにいる警察官のうちの一人が拳銃を構えていた。そして銃口からは僅かながら硝煙が昇っている。

多分威嚇射撃だろう。

……発砲ってこんなに簡単にしているのか？  
ほら、なんとか党の人みたいに「警官は襲われても拳銃は使っな」とか「犯罪者の人権をもっと大切にしろ」だの後からうるさいんじゃないの？

拳銃を構えている警察官の目線の先には、何人かの人間がいた。あれが『暴徒』だろうか？

暴徒にしてはやけに静かで、実にゆっくりとした動きで警察官たちに近付いてきている。

そして先程の威嚇射撃にもまったく動じていないようにも見える。暴徒なら暴徒らしくギャーギャー騒いで辺りのものを全部ぶっ壊して、「ヒヤッハー！皆殺しだー！」だのなんだの叫ぶものだとおもっていたが。

…そりゃ世紀末か。

ともかく、暴徒らしき人々は警察官に向けて向かっていく。

その足取りはまるで酔っ払いのように覚束なくフラフラとしており、時折身体をブロック塀にぶつける者もいた。



しかし、ぶつかつた者もそれを意に介しておらず、警官達に向かつてただ歩き続ける。

俺は余りにも不気味な集団にメガホンを持った警察官が怒鳴るまで閉口したままだった。

『こ、これは警告だ！ これ以上近付けば実弾射撃を行う！』

警告のつもりらしいが、警官の声には明らかに動揺が滲み出ている。

その時、男が突然家の陰から飛び出してきた。

銃声を聞いてパニックに陥つたのか男の狼狽具合はかなりのもので、警官達の制止すら振り切つて暴徒達の中に紛れ込もうとした。

すると、暴徒のうちの一人が逃げ出そうとした男に飛びかかり、地面に引き倒した。

暴徒に組み敷かれた男は、押し掛かつた暴徒を必死にどけようとしているが、暴徒は男を抑えつけたまま放そうともしない。

男が急に上ずつた悲鳴をあげた。

何事かと目を凝らすと、男を組み敷いている暴徒とは別の暴徒の一人が、男の足に噛みついていた。

それで男の抵抗する力が緩んだのか、男を組み敷いている暴徒も同じように男の首筋に食らいついた。

男の首から鮮血が噴き上がり、長く尾を引く悲鳴をあげ、………動かなくなった。

暴徒は動かなくなった男の死体を「食い」始めた。

暴徒は無表情に男の身体に食らいつき、肉を食いちぎり無表情のまま咀嚼する。

人が目の前で殺されたこと以上に、信じられない。

人が、食われている。

先程までのテンションは完全に消え失せ、ただただ呆然とそれを眺めているだけだった。

が、一発の銃声によって現実へ引き戻された。

警官が撃った弾は男の肉を咀嚼している暴徒の胸を見事に撃ち抜いた。

ところが、人間の構造上の弱点である心臓のある胸を撃たれたにも関わらず、暴徒はゆっくりと能でも踊るかのように立ち上がった。

いくら威力の弱い拳銃弾でも、銃の弾として作られている以上、人を殺すことなど造作もない。

しかし、今の暴徒はそうではなかった。

胸を撃ち抜かれても、平然としている。

それどころか、男の死体を食べるのを止め、また先程のように警官に向かってノロノロと歩き出した。

もう一発銃弾が銃声とともに暴徒の身体を貫いた。

しかし、暴徒は大きく仰け反っただけで、なにことも何事もなかったかのように歩き出す。

……間違いなくコイツらは普通じゃない。  
普通の人間なら、とつくに死んでいるはずだ。

更に隣家からなにかが割れるような音がした。

見ると、隣家の林さんの家に暴徒が入り込んでいた。

しばらくして絶叫とも悲鳴ともつかない叫び声があがった。

「クソ、どうなってんだ!？」

毒づきながら警官達に視線を戻すと、驚くべきものが目にはいった。

先程まで倒れていたはずの男が起き上がったのだ。

しかし男の首からは驚くほどの血液が溢れだしており、赤ん坊のように首をガクガクさせながら歩く男のさまは、とても生きているようにはどうしても見えない。

それを見て、俺は確信した。

コイツらは『暴徒』なんかじゃない。『ゾンビ』だ。

頭を疑われかねない発言であるのは分かっている。

しかし、そうとしか思えないのだ。

心臓を撃たれても死なない、人間の肉を食う、一度噛まれた人間は同じように歩く死体と化す。

ともかく、こんな悠長に構えてる場合じゃない。

俺は急いで窓を閉めると、部屋の壁にかけてある木刀を引き抜いた。こついったのは簡単な護身用具になる。

更にタンスの引き出しを開け、小さなリュックサックを取り出す。

逃げ回るんだつたら、なるべく軽い装備の方がいい。

木刀とリュックサックを持ったまま、二階から転がり落ちるように一階に降り、キッチンへ向かう。

棚を乱暴に開け、乾パンを二袋、500ミリリットルのミネラルウォーターのペットボトルを一本、リュックサックに突っ込んだ。

銃声は更に増え、銃声の中にもいくつか怒鳴り声や悲鳴が入り交じってきた。

時間はあまり残されていない。

流し台の上に置いてある果物ナイフを手取る。

ゾンビと戦う際には役にたちそうにもない代物だが、無いよりはずつとましだ。

半ズボンのポケットに財布が入っていることを確認し、俺は玄関に出た。

靴箱の中から新しいシューズを取りだす。

普通なら靴紐すら結ばないが、転ぶのは命にかかわることだ。

いざというときに「アシクビヲクジマシター」なんてことになったら笑えない。

そして助けを求めた生存者にも「イキノコルカチハアリマセン！」とか言われて顔を踏みつけられか、そのままゾンビの餌となるかどちらかだろう。

アホな冗談をかましているうちに靴を結び終わり、思いっきり玄関を開けた。

少し見なかった間に、住宅街は地獄と化していた。

ゾンビはさきほどより更に増え、逃げ惑う市民を次々と襲っている。

襲っている者の中には少数だが紺の制服を着たものも混じっている。

バリケードは最早意味をなさなくなっており、ゾンビに蹂躪されていた。

今まで死体を貪っていた一体のゾンビがこちらを振り返り、血で染まった歯を剥き出しにして襲い掛かってきた。

「ちっ！」

舌打ちしながら突進を真横に避け、ついでにゾンビの足を引っ掻けた。

ずしゃっ、とゾンビが顔から道路に倒れ込む。

「っしゃあーいくぜ！」

何故かハイテンションを取り戻した俺は、阿鼻叫喚の住宅街の朱に染まった道路を走り出した。

## 2話 はじまりはじまり（後書き）

やっとゾンビがw

千歳の反応がおかしいですがそこは「愛嬌」といつつで・・・w

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2759z/>

---

混沌と化した世界

2011年12月20日20時52分発行